## 製品になるための試練。

ホルベインでは油絵具の製造が終わると、4工程の製品テストを行います。中でも油絵具の描き味や伸びに影響する「粘稠度」を調べるのがスライドメーターという測定器具。まずは、異常に重い鋼製ロールで絵具を押しつぶします。そして、大きな砝型に押しつぶされた油絵具の、かたちの広がり具合によって粘りやさくみを計ります。絵具は精密な製品。いくつものテストを乗り越えて、ようやく製品になるのです。ホルベインの命は品質です。

● 20号チューブ(110ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社　東京都豊島区東池袋2-38-4 TEL.03(3983)9211　大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6722)1554

Holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

# イケムラレイコ

## 内なる眼に映る〈ひとつの絵〉

鷹見明彦＝文　森田ケン＝写真＊印

1983年、ドイツ、ニュルンベルクでのレジデンスにて。画材メーカーの基金による招待で翌年この地のクンストハーレで個展が実現した。それはスイスからよりきびしい環境を求めてドイツへと移る契機となった

月の娘　1984　キャンバスにアクリル絵具
270×220cm　個人蔵

*1984*

**「ミメーシスとしての絵画ではない、ドローイングが重視されていました。〈個人の神話〉を語る方法があると」**

冥い闇のヴェールに浸透する妖精のような少女の像。たたずんだり横たわっていたりする画像は、また内部に闇を抱えた粘土やブロンズの塑像をともなって、ときどき、海をこえた母国での展覧会に出現してきた。それにめぐり遭った者は、いまだ多くはないが、一度眼にすると心の深みに潜んでいるものを喚びおこす作用をもたらす力を秘めている……。

黒い大きな眸をもった画家は、少女期を三重県の津市で過ごした。「まだ戦後の影響が残る時期でした。振り返れば、私が美術の道に進んだのには、祖父の存在が大きかったとおもいます」。

建築家だった祖父は、仕事の傍ら屏風絵や木彫、寺院の模型などをよく制作して、収集家でもあった。庭園に茶室や蔵のある屋敷の空間には、感化されたという。

「西洋と日本美術の全集があって、ゴッホや初期の日本の洋画家たち——芸術に人生を燃焼して早世し

# 1989

**「アルプスの光に、絵画は、スピリチュアルなメディアでなければと教えられました」**

ヤヌス　1989　キャンバスにアクリル絵具
116×95cm　SHUGOARTS蔵

た画家たちに惹かれました。作品だけでなく、その生き方に」。

「それと海のそばで育ったことは、留学先に地中海圏を選んだのにつながっています」。

外語大に進んだのは、語学を身につけて自立した人生を切り拓きたいという思いから。スペイン語科にしたのは、みながあまりやらないことをやりたかったのと海を介して諸大陸に拡がるスペイン語圏の広さへの憧れもあった。

一九七三年、トランクひとつでの旅立ちだった。グラナダへ行ったのは、内陸よりも地中海のそばで暮らしたかったからだった。そこでマリア像を造る彫刻家に師事して、カトリックとイスラム文化が混交した土地のなかで、宗教芸術の厚みを実感した。「芸術が自己を捧げる行為としてあった歴史を肌で感じました。彫刻家の先生の紹介でセビリアの美術アカデミーにはいって五年間、絵画と彫刻、素描を学びました。まだフランコの政権が続いていた時代、アカデミックな教育でしたが、スペインの過去の美術からは、本質的な影響を受けました。ゴヤはもちろんですが、リベラやムリーリョの宗教画、陰影深い闇を描くスルバランの黒など」。

七九年、結婚相手の母国スイスのチューリッヒに移住する。この小都市は、ドイツ、イタリア、フランスの接点としてヨーロッパの中央に位置して、経済・文化がよく開けた場所だった。八〇年代にかけてはスイスの現代美術も盛んになっていた。「下絵ではない表現としてのドローイングが重視されていました。より親密

花嫁　1991　焼成土に釉薬
109×40×25cm　個人蔵

## 2003 「麻布の下地に長い時間をかけて、うす塗りを重ねていきます。浸透した色彩は、こちらでもあちらでもない中間域にある」

夜の浜辺　2002-03　麻布に油彩　100×140.5cm ＊

なメディアである紙のドローイングや、ミメーシス(実像の模倣)としての絵画ではないドローイング的な絵画が」。

八〇年には、フィッシュリ&ヴァイスなども扱っていたパブロ・シュテーリ・ギャラリーの個展でデビューした。

《月の娘》(一九八四)は、初期のドローイング的な絵画の一作。「深層心理のなかの恐怖や闘争のヴィジョンがモティーフでした。個人の内部にある神話をことばではなく語る方法があると信じていました」。

八五年には、「小さくて安全なスイスから、よりきびしい環境を求めて統一前の西ドイツのケルンに移った。トランクひとつだった旅立ちから十数年、作品を含む荷物は、トラック一台分になっていた。

「八〇年代のケルンは、ポルケやリヒターもいてドイツの現代美術の重要な拠点でした。コンセプチュアルへの反抗を理念とする『ミュールハイムの自由』というグループが活動していました」。当時、ドイツの新表現主義、イタリアのトランス・アヴァンギャルド、アメリカのニュー・ペインティングとして盛り上がった動向の渦中にいた。八〇年代後半には、ドイツ、スイスの主要な美術館での個展や企画展への参加も増えるにつれて、東京国立近代美術館や原美術館などの企画展にも出品したが、その多くは作品のみの帰国だった。

《ヤヌス》(一九八九)は、日本での初個展となった佐谷画廊の展覧会への出品作。この作品は、イタリアに近いアルプスの山奥の城に招待されて、山中に籠もって描かれた連作の一枚だった。「山へ行ったのは、危機感からでした。そこはセガンティーニの村にも近い場所でしたが、厚みのある深い城の窓からはいる高地の光は、透明度が高く、絵画は、非物質的でスピリチュアルなメディアでなければと再認識しました」。

「物語や記号的なイメージから解放されるのは、抽象化ではなくて、形而上的(メタフィジカル)な表現――ドストエフスキ

SHUGOARTS（東京）での個展「Madre Mare」（5月22日まで）の会場にて。マドレ・マーレは、ポルトガル語で「母なる海」。少女像が浮かぶ空間の中心には、光をたずさえた夜の海原の絵が拡がっている。名古屋のギャラリーHAMでも個展が同時開催中（5月29日まで）＊

ーやカミュのように人間の深部を追求していく闘いとそこからの解放の問題なのだとおもいます」。

《花嫁》（一九九一）は、粘土に釉薬をかけて焼成した立体作品。このころから粘土による塑型を焼いた彫刻も多く制作するようになった。絵画、ドローイング、彫刻にわたる生命の発生時へと還ったような転回は、九〇年代をとおして、次第に人間へ、少女像へと進化と成長を遂げていった。

《夜の浜辺》（二〇〇二―〇三）は、三年ぶりの東京での個展に出品された最近作。これまで孤り闇のなかでじっとしていた少女が、近作では、ダブルになり空や浜辺で増殖し、動きだした。

「群像のように見えますが、ひとりでもあるんです。いろいろな時空での存在の動きが重なり合っています」。この絵では、水平と垂直の関わりから拡がっていく動きや、「葡萄の房」のような、個と他の緊密な結びつきが現れている。

「自画像というよりも、自分の内側にある核的なもの――内面の視覚に映る〈ひとつの絵〉があるはずです……」。

画家の声は、ギャラリーの真ん中に拡がる光をはらんだ夜の海からの呼び声となっていた。

（二〇〇四年四月十五日、東京・新川のSHUGOARTSにて取材）

◎たかみ・あきひこ［美術評論家］

**いけむら・れいこ**／Leiko IKEMURA　1951年三重県生まれ。72年大阪外国語大学中退。73年スペインに留学。78年セビリア美術大学修了。85年以降ドイツに移り、ケルンとベルリンを拠点に活動する。91年よりベルリン美術大学で教える。おもな個展に84年ニュルンベルク・クンストハーレ（ドイツ）、87年カールステン・グレーヴェ・ギャラリー（ケルン）、バーゼル現代美術館（スイス）、88年ローザンヌ現代美術館（スイス）、90年佐谷画廊（東京）、92年ザルツブルク・クンストフェライン（オーストリア）、95年ギャラリーHAM（名古屋）、99年メルボルン国際ビエンナーレ日本館代表（オーストラリア）、2000年豊田市美術館（愛知）など。おもなグループ展は83年「アクチュアル83」（レーンバッハ美術館［ドイツ、ミュンヘン］）、85年「自立性のあるアート」（ウィーン近代美術館、20世紀美術館［オーストリア］）、「深い眼差し」（ダルムシュタット州立博物館［ドイツ］）、88年「ハラ・アニュアル」（原美術館［東京］）、89年「現代美術への視点――色彩とモノクローム」（東京国立近代美術館／京都国立近代美術館）、「ドローイングの現在」（国立国際美術館［大阪］）、91年「ザ・サイレント・パッション」（栃木県立美術館）、94年「浸透」（ハイムハウス・チューリッヒ［スイス］）、98年「色の博物誌・白と黒」（目黒区美術館［東京］）など。